

情報教育実践教師育成のためのWBTコミュニティの構築とその評価

中川 齊史(徳島県池田町立池田小学校)・中川 一史(金沢大学教育学部)
児玉 晴男(宮崎県児湯教育事務所)・佐藤 幸江(横浜市立大口台小学校)

筆者らは2004年度より、情報教育実践教師育成のためのWBTコミュニティを構築し、それらのWBTプログラムを設計・運用してきた(中川 2004)。本年は2年目となり昨年の受講生とともに、新たなコミュニティを構築し運用を行ってきた。昨年の試行から明らかになった課題を修正し、新しいWBTコミュニティを構築した。本論では、本年の取り組みについて報告する。

キーワード: 情報教育、e-learning、協調学習、教師教育

1 はじめに

研究の目的

小学校において、日常的にコンピュータなどを利用して指導できる教師はふえてきている(文科省 2005)が、情報教育を核として、授業実践力を高めることは、校内研修や指定研修だけでは難しい状況がある(戸田 2004)。

そこで、全国の若手教師の中から15名をえらび、ITの効果的な授業活用を行う上での資質を高めるために、1年間WBTを行ったのが、昨年のこの実践(通称中川塾)である。

本年(第2期)は、新たに参加する10名の教師を塾生としてむかえ、新しいコミュニティを構築した。もちろん、新しくWBTプログラムを構築するために、昨年の実施により明らかになった課題が解消されるよう設計を行った。

本研究では、昨年明らかになった課題を解消しながら実践を行い、WBT型研修システムとしての評価を行う。

昨年の課題

昨年は試行段階ということで、次のような課題が明らかになった。

(1) 毎月出される課題(出題意図)を把握するのに時間がかかる。

(2) 1年終了時の教師の力量形成をどのように測るか分かりにくい。
(3) コメントを毎月返す師範の負担をどのように軽減するか

そのほか、協調学習としての視点から、中川(2005)が次の点を指摘している。

(4) グループの中での役割分化が想定されていない。
(5) 教え合いによる知識の洗練化が見られない。

2. WBTシステム

前項の(1)~(5)を解消するために図1のようなシステムとした。

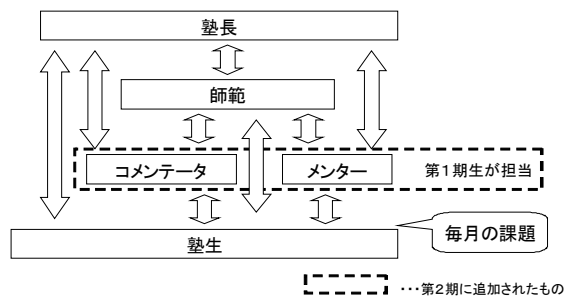


図1 第2期のシステム

課題(1)の解消には、師範と塾生の間には、コ

メンテータとメンターを置き、第1期と第2期の塾生の役割分化を行った。また、毎月の課題の解説や、コメントを返す中で、教え合いやバーチャルなディスカッションを期待した。

課題(2)については、この研修システムでねらいとする教師の力量と、「ITで築く確かな学力」(2002)で記述されているIT活用推進のための基本的視点に、本研修で求めているねらいを加え課題を設定した。特に本研修では、
○授業づくりのヒントとなる情報の共有
○研修から実践へのきっかけづくり
を年間通しての目標とした。

課題(3)については、第1期生がコメントータとして毎回の評価をすることにより、師範が毎回多くの塾生に同時にコメントを返す負担を軽減した。

課題(4)(5)については、第1期生と第2期生より親密な関係を期待して、ML等を中心にメンターを用意した。

3. 研究の方法

本年度の10名の受講生および、コメントータやメンターなど本年度主要業務に関わっている昨年の受講生へのアンケートにより、本研修システムがめざしている教師の力量形成システムとしての機能について評価する。

4. 結果

第2期は、塾生(受講生)と、それらを支え、評価する1期生の2つの立場の違いが存在する。しかも第1期生はコメントータとメンター、事務局と分かれるため、学びを支える人的な構造が少しややこしく見える。そこで、

- (1) 関係者アンケートの集計から見えるもの
- (2) 第2期の特徴的なやりとりから見えるものについて、述べる。

(1) 関係者アンケートから

今回の実践に中心的に関わっている1期生に、半年間の状況について、自由記述にてア

ンケートを行った。その結果、それぞれの立場によって、異なる印象を持っていることが分かった。

図2にあるように、コメントータとしては、昨年までの自分の立場が、現在の立場に活かされていると答えているが(第II象限)、反面、全ての2期生と顔を合わせていないコメントータは、顔を思い浮かべながらコメントを書けないので、非常にやりにくいと答えている。(第III象限)

また、今回メンターとして役割を持っている者からは、自分が昨年同じ立場(塾生)で失敗したことなどをもとに、一番苦しい思いをしている第2期の塾生を励ますことができた反面(第I象限)、メンターであるにもかかわらず、厳しい態度での対応など、ゲキを飛ばすつもりが、2期生のモチベーションを下げてしまったこともあったのではないかと答えている(第IV象限)。

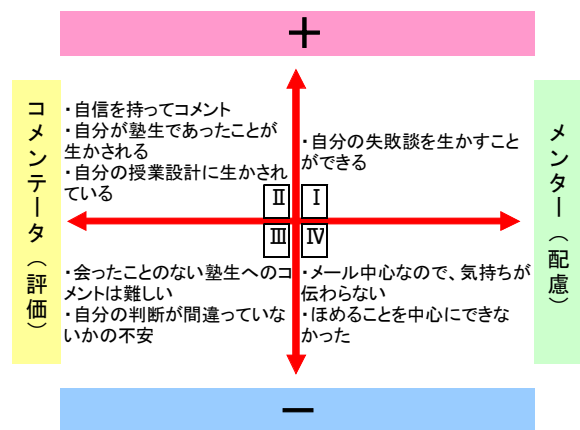


図2 1期生アンケート結果

次に第2期生、つまり現在の塾生の回答を見てみる。図3にあるようにどの象限も同じくらいの回答量となった。

アンケートでは、この研修で目的としている授業実践力の向上について、「ふだんの授業に変化があったかどうか」について尋ねたところ、全ての回答者から授業の臨み方や教材研究についての実践力が向上したと回答があ

った。(第II象限)これは、本研修システムが期待している目標に到達していると考えてよい。さらに、このWBTを中心とした研修システムについても、多様な評価や人的な交流などへの成果が見えるとしている(第I象限)

しかし、現場教員ならではの時間不足も多くの塾生が感じている。e-learningにおけるこれらの問題は、様々な研究にて指摘され続けているが、今回もメンターなどで対応し、常に塾生のモチベーションを継続させたつもりであるが、根本的な解決には至っていない(第III象限)。

そして、今回のWBTシステムとしての問題点をまとめてみると、第IV象限にあるように、塾生同士の情報交換の少なさや、積極性のばらつきが気になっているとの回答を得た。つまりこれは、最初に述べた今回のシステムの改善点としての、「グループの中での役割分化や教え合いによる知識の洗練化」をはかるためのコメントやメンターの役割についての十分な設計がなされていなかったためではないかと推測せざるを得ない。

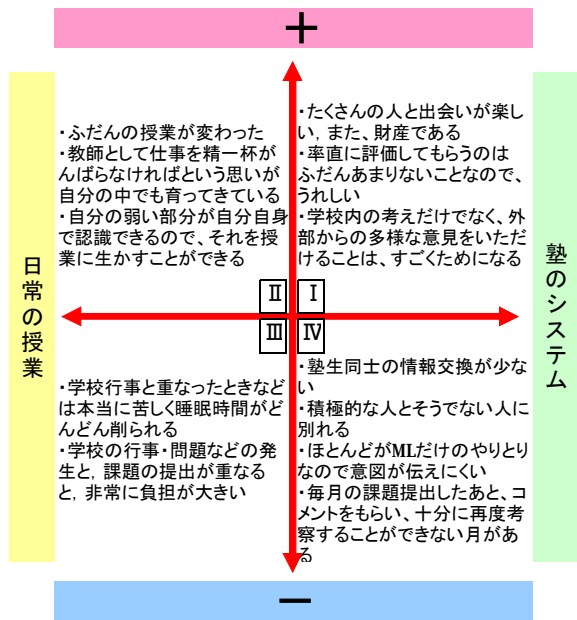


図3 2期生アンケート結果

(2) 第2期の特徴的なやりとりから

第5回課題の時に、短期間に数多くのやりとりが見られた事例があった。その特徴的なやりとりを次のように分析した。(図4)

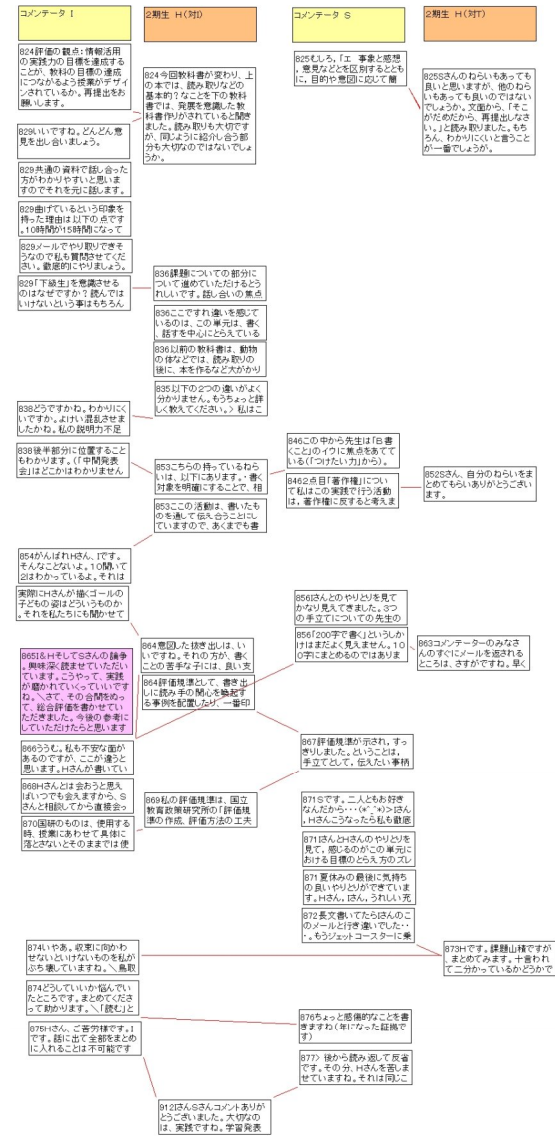


図4 2期生とコメントータのやりとり

コメントータ(1期生)が2期生の課題に対して、再提出を促した。それについて2期生が少し納得いかないという内容のメールをMLに流したところからはじまる。

登場するのは、コメントータのIとS、そして2期生のHである。実はHとIは以前からよく知っている仲であり、気心が知れていると言うことで、ML上で熱い討論が繰り返された。

授業者が意図を持って用意する授業計画について指摘されたところから、単元の目標のとらえ方についての議論がはじまった。このやりとりは、ML上で展開されていたため、ほかのコメントータや2期生も目に見えている。このことについてコメントータのIは、

私のめあてのしぼり方や、めあてに応じたしかけの作り方を皆に公開することによって、それがたたき台となり、しかけの作り方について皆がそのことについて考えを深めるきっかけになればと思っていた。

と答えているように、2期生を意識したコメントのやりとりを行っていたことを語った。

また、2期生のHはコメントータIについて、

即レスをくれ、きちんと説明される点から改めてたくさん教材研究をした様子が伝わってきました。勉強になりました。MLで2期生以上に勉強されていたので頭が上がりにません。

と、答え、

きびしいながらも、ダイレクトメールでのフォローがあったりしたから安心しました。揚げ足取りでなく、いっしょに良いものにしていこうという言葉が必ずあったのも安心できた一つです。

と、あくまでも信頼できる人間関係の上での議論がなされていたことがうかがえた。

5. 考察

本研修システムは、その目的として、「情報教育やITを使った授業の塾生の印象や考えを崩し、新たな考え方やものの見方について互いに気づいていく」ためのコミュニティの場の提供を掲げているが、4の(2)で述べたような教え合いや議論をくぐ

り抜けて、はじめてその目的を達成できるものだと言える。

つまり、4の(1)と(2)から次のことが言える。

(1) 今回の研修システムを有効に稼働させるためには、WB Tではあるが、オフラインである程度つながり、その延長線上のオンラインというスタイルは外せない。そのためのシステム利用初期の合宿形式の会合が必要。また、コメントータとの顔合わせが大切。

(2) 感情的にならず、冷静に議論するために、コメントータやメンターの役割が重要。

今後は、特に(2)の役割について、さらに改善と評価を続けていきたい。

※本実践は、松下教育研究財団の補助を受けて実践研究を行っている。

6. 参考文献

○学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果(2005) 文科省 Web ページ

○中川一史・中川斉史・児玉晴男・佐藤幸江(2004)「e-learningを核にした実践研究コミュニティの構築」, JAET 第30回全国大会講演論文集 F103-08

○戸田俊文「教員研修におけるe-learningシステムの適合に関する研究」, JSET 第20回全国大会講演論文集 pp.455-456

○中川斉史(2005)「小学校における情報化推進のための中核教師支援システムの構築」 鳴門教育大学修士論文

○木原俊行ほか(2002)「Webを活用した放送教育指導者養成プログラムの評価」, JSET 第18回全国大会講演論文集 pp.113-116

○初等中等教育におけるITの活用の推進に関する検討会議(2002)「ITで築く確かな学力」, 文科省 Web ページ